

# 清泉アカデミック Can-Do 尺度を利用した埼玉県 外国語科設置校における高校英語教育改善の試み

長沼 君主

## The Application of Seisen Academic Can-Do Scale in High School Contexts

This study reports on an ongoing research project (2006-2008) to apply the Seisen Academic Can-Do Scale [CDS] (Naganuma and Miyajima, 2006) to high school contexts in Saitama Prefecture. Firstly, the teachers in each of the participant high schools analyzed their English curriculum and identified classroom activities which correspond to the can-do statements in the Seisen Academic CDS. Next, attainable goals at each grade were discussed among the teachers with reference to the can-do and needs survey data of their learners. Each school differs in their skill focus and the idea of can-do framework allows the teachers to map the skills (and sub-skills) covered in their classroom activities and link them vertically across grades and horizontally with other classes. Several can-do items were then selected at each school and the evaluation tasks of the can-do items were developed.

The process of development itself using the scale is found to be beneficial for the teachers as it makes them consciously examine the classroom tasks and materials they are adopting in their class and externalize their hidden internal syllabi or beliefs, which are sharable with their colleagues. In the next stage of the project, further development and modification of can-do tasks and items will be required to contextualize the can-do framework for their own school.

## 1. 研究目的

文部科学省の SELHi (Super English High School) 事業も 6 年目を迎え、今年度研究開発指定校も含め、延べ 169 校の高校が実践研究および教育改善に取り組んできた。埼玉県でもこれまで 6 校の高校が SELHi の指定を受けているが、SELHi 指定期間中に得た研究成果を、指定期間後にどのように学校に活かしていくかとともに、モデル校として他校へどのように波及効果を及ぼしていくかが課題となってくる。

埼玉県では「英語運用力向上推進事業」として教育委員会の主導のもと、県内の外国語科設置校 8 校を対象としたプロジェクトが行われている。プロジェクトは 2006 年度から 2008 年度にかけて 3 年間の予定であり、その後、外国語科設置校を拠点校として、他校へと輪を広めていくことが期待されている。プロジェクトにおいては、外国語科だけでなく、普通科においても調査が行われ、4 月に英語能力調査と質問紙調査を行い、その結果を受けて夏季に校内研修を実施し、秋からの授業に反映させた結果を、再度、11 月に質問紙調査を行うことにより検証し、また冬季の校内研修で取り組みの見直しを行うといっ

たプロセスで進められた。

質問紙調査では、学習者の入り口での状況をつかむため、4月調査において、入学前の学習履歴調査が行われた。一方、11月調査においては、改善の取り組みの影響を調べるため、入学してからの学習状況調査が行われた。また、両時点において直接的な学習への取り組みだけでなく、情意的な変化も調べることを目的として、動機づけ調査も実施された。そして、能力テストによって示される英語力の量的な変化とともに、英語力の質的な変化も調べるべく、「英語で何ができる」かを具体的に記述した Can-Do 調査が実施された。Can-Do 調査では、活動の経験の度合いや今後の学習へのニーズも尋ねられた。

Can-Do 調査としては、昨年には英検 Can-Do も公開され、それぞれの級の合格者が英語を使ってできることがリスト化されており、また、TOEIC でもリニューアルに伴って、テスト項目を詳細に分析することにより、テストタスクにおいてどのようなことができるかの指標を Can-Do の形式でフィードバックしている（TOEIC では旧テストにおいても、スコアバンドごとにできることを記述した Can-Do ガイドを公開している）。TOEFL も iBT に変わる際に、得点との関係を示した Can-Do を公開しており、テストスコアによる量的な能力指標だけでない、より詳細な質的な評価が求められるようになってきている。

プロジェクトにおいてはこのような流れを受け、清泉女子大学で開発された「清泉アカデミック Can-Do 尺度」（長沼・宮嶋，2006）を用いた調査を4月と11月に行い、どのような技能において能力的な伸びが見られたかの検証を行った。本研究では2006年度調査の結果から、高校1年生の入学の段階でどのような能力を持って入学してきており、その後の学習によってどのような能力が伸びたかを探るとともに、SELHi 校と SELHi 校以外の外国語科設置校での授業改善の取り組みの違いにも焦点を当てた分析を行う。

## 2. 研究方法

研究の対象となったのは埼玉県外国語科設置校の1年生2,529名（外国語科328名、普通科2,201名）であった。外国語科設置校は8校あるが、その内、半数の4校は現在 SELHi 指定中、または過去に指定を受けた高校であった。調査に当たっては、4月調査において GTEC for STUDENTS が実施された他、「清泉アカデミック Can-Do 尺度」等の質問紙調査が行われた。「清泉アカデミック Can-Do 尺度」は、旧 TOEIC や英検 Can-Do のリストのような現実社会における日常的または職業的行動場面で行うことを記述するのではなく、教室学習場面での学習タスクに基づいた言語行動を記述したものであり、4技能のそれぞれで代表的と思われる5つのタスクを取り上げている。そしてそれぞれのタスクの内容を単に記述し、リスト化するのではなく、学習段階を想定した具体的

な記述に基づく4段階の選択肢が設けられているのが特徴である。

例えば、「高校の教科書レベルの短いテキストを音読することができる」という項目を取り上げると、「モデル音声を何回か聞いても、つかえずに自然に読むのが難しい」という段階が最も低い、いわゆるできない段階であるのに対して、1年生の普通クラスでは、「モデル音声を1回聞けばできる」といった少しできることはあるが、まだ不十分な到達である段階が想定され、1年生の上級クラスまたは2年生の普通クラスでは、「モデル音声を聞かなくてもあらかじめ黙読をすれば音読できる」といったなんとかできる段階、そして2年生の上級クラスでは「モデル音声を聞かず、黙読しなくても音読ができる」といったさらに上の段階を設けている。結果は11月調査と比較され、どのような能力において伸びが見られたかが検証された。

### 3. 分析結果

まず始めに4月調査におけるCan-Do調査結果から、項目間にどのような関連が見られるかを調べるためクラスター分析が行われた。分析に当たってはユークリッド距離を用い、Ward法によりCan-Do項目の分類を行った。結果として得られた樹上図を図1に示す。項目は大きく4つのグループに分かれ、①D04～C05、②A04～A01、③B01～C01、④B04～D01となっている。それぞれのグループの項目は、表1に示す通りである。①のグループにはプレゼンテーションやパラグラフライティングなど、まとまった情報を扱うタスクが見られる、②のグループにはディスカッションやストーリーテリングなど口頭のタスクが固まっている、③のグループには日常的なリスニングや物語のリーディングなど、日常性の高いタスクが含まれ、④のグループにはロールプレイやパラグラフリーディングなど、よく行われる典型的な教室活動が入っているようである。

Rescaled Distance Cluster Combine

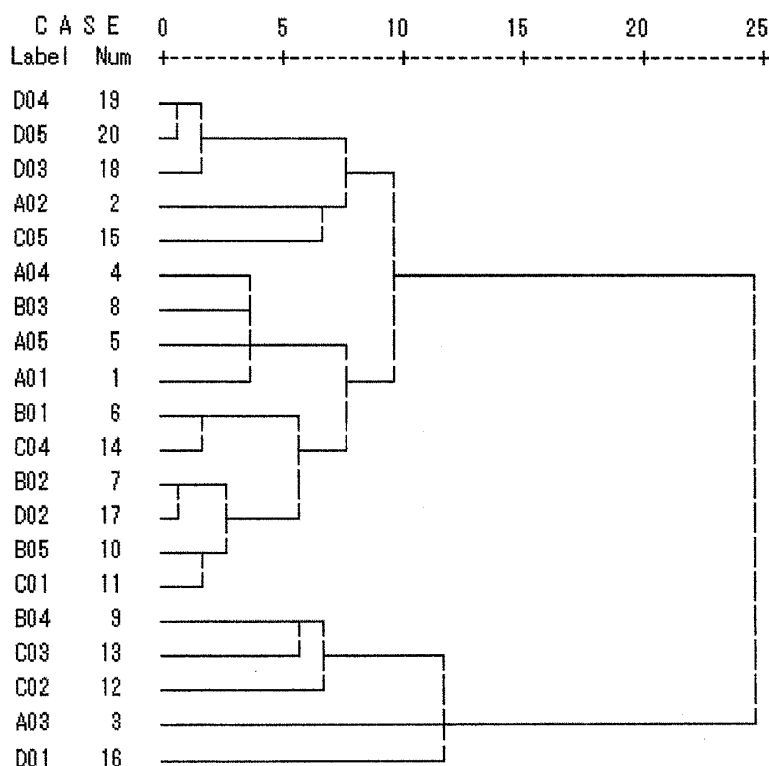


図1 Can-Do 項目クラスター分析結果

表1 Can-Do 項目分類

番号	Can-Do項目
①	A2 映像資料を使いながら、よく知っている話題に関するプレゼンテーションができる
	C5 高校の教科書レベルの短いテキストを音読することができる
	D3 英語で一貫したまとまりのある文章を書くことができる
	D4 英語で出来事や状況を説明する文章をことができる
	D5 知人や友人、先生からの英語のメールを読んで、返事を書くことができる
②	A1 高校の教科書レベルの短いテキストを読んで、その内容を英語で説明できる
	A4 よく知っている話題に関して、数人のグループで会話(ディスカッション)ができる
	A5 日常的な場面を描いた4コマの絵を見て、その内容を英語で説明できる
③	B3 あまり専門的でない内容に関する、比較的ゆっくりとした英語の説明を聞いて理解できる
	B1 日常的话题や関心のあるテーマのニュースや、映画などを英語で聞いて理解できる
	B2 日常的话题に関する英語を聞いて、理解することができる
	B5 日常的生活上での英語(駅のアナウンス、店でのやりとり等)を用いて、必要な情報が理解できる
	C1 日常的に接する英語で書かれたテキスト(広告、雑誌、新聞の記事等)を読んで、必要な情報が理解できる
	C4 辞書を引かずに英語の物語やエッセイを読むことができる
④	D2 高校の教科書レベルの英語を聞いて、メモを取った上で英語で要約することができる
	A3 授業で練習した表現を使って、日常的话题に関してペアで会話(ロールプレイ)ができる
	B4 授業中に教師が話す英語を聞いて理解できる
	C2 高校の教科書レベルの短いテキストを、ある程度の速さで読むことができる
	C3 ある程度の長さの構成のはっきりとした英文を読んで、理解できる
	D1 英語で書いた原稿を見て、自分で文法的な誤りを直すことができる

これらの4つの項目群を SELHi 校4校と SELHi 以外の外国語科設置校4校(非 SELHi 校)の間で、4月調査時と11月調査時で比較した結果を図2に示す。分散分析の結果、調査時期と Can-Do 項目、調査時期と SELHi 校かどうかで有意な交互作用が見られた(表2)。全体的な結果としては、①のグループの Can-Do 項目で能力に対する自信

が低く、②と③のグループが中程度で、④のグループで自信の程度が高いことが分かる。高校入学段階では、④のロールプレイやパラグラフリーディングなどにはある程度自信があるものの、①のようなプレゼンテーションやパラグラフライティングなどのような、構成のしっかりしたまとまった内容のプロダクションタスクには自信が見られないことがわかる。

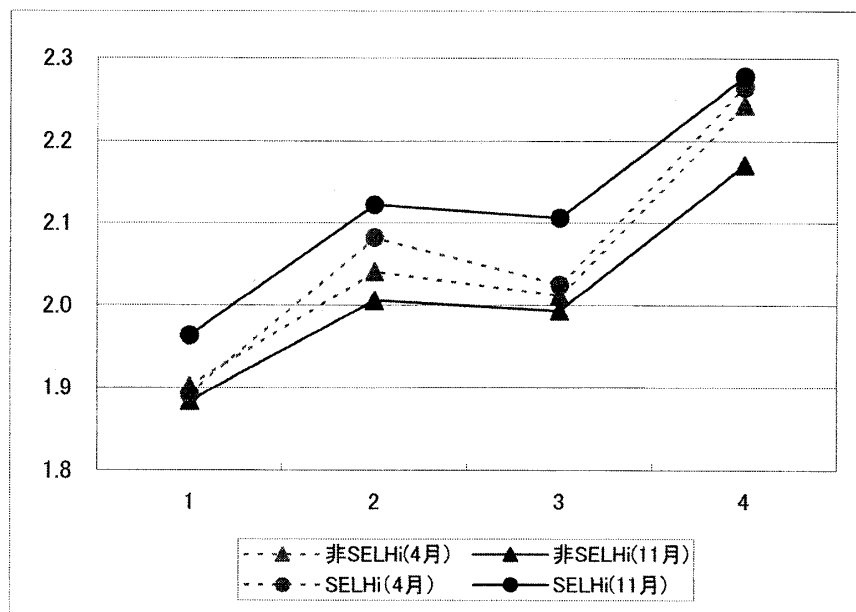


図2 SELHi校-非SELHi校 Can-Do項目群比較

表2 Can-Do項目群分散分析結果

	F	p	
TIME	0.9	.344	n.s.
TIME × SELHi	28.5	.000	***
CDS	985.8	.000	***
CDS × SELHi	4.6	.003	**
TIME × CDS	16.1	.000	***
TIME × CDS × SELHi	0.5	.657	n.s.
SELHi	11.5	.001	***

SELHi校と非SELHi校を比較してみると、4月調査の段階ではやや②のグループのCan-Do項目で非SELHi校の生徒の自信が高いものの、他のグループではほとんど差が見られないことがわかる。ところが、11月調査の段階では非SELHi校ではともすると能力に対する自信が低下しているのに対し、SELHi校では上昇し、すでに大きく差が開き始めていることが見て取れる。④のグループのCan-Do項目のような典型的に見られる教室活動に対する自信はすでにある程度高い値であったことからほとんど変化は見られないが、とりわけ、③のグループのCan-Do項目での自信が高まっている。1年生の初期の段階ではBICS的な日常スキルに焦点があたっており、中学の段階ではまだ低かった能力へ

の自信が育ってきていることが見て取れる。その一方で①や②といったより CALP 的な能力においても少しずつ自信をつけてきており、全体的に向上が見られることがわかる。

それに対して非 SELHi 校では高かったはずの④の通常の教室活動に対する自信も低くなってきてしまっていることがわかる。これは同じ技能でも中学段階と比べて、高校段階では扱っている教材の難易度が高いことから自信を失っている可能性が示唆される。

Can-Do 項目で測られる能力は自己報告型の能力に対する自信を示しており、スコア的な能力をあげるとともに、体感的な伸びを感じさせることも重要となってくる。吉田他(2004)では、日本の高校生と、韓国や中国の高校生の Can-Do 能力が比較されているが、同一スコア帯の学習者を比較しても日本の高校生で値が低く、実際のスコアで測られた能力と比べて、日本の高校生では自分の能力に自信を持っていない様子が伺える。

これらの能力記述に基づく Can-Do スコアの変化はテストスコアとはどのように関連しているのであろうか。図 3 に 2006 年度 4 月調査時の GTEC for STUDENTS の各スキルの得点が 2007 年度 5 月調査時にはどのように変化しているかを、SELHi 校と非 SELHi 校を比較する形で示す。図からはリーディングスコア (R\_score) は SELHi 校と非 SELHi 校とで差がなく分散分析の結果でも、有為な交互作用が見られなかったのに対して ( $p=.335$ )、リスニングスコア (L\_score) とライティングスコア (W\_score) では SELHi 校において顕著な伸びが見られ、統計的にも有意な交互作用が見られた (共に  $p=.000$ )。このことは Can-Do スコアの比較において、日常的なリスニングタスクが多く含まれる③とパラグラフライティングが含まれる④で、SELHi 校で伸びが見られたことと関連しているものと考えられ、Can-Do に基づく能力記述スコアの妥当性を裏付けるものであると言えよう。

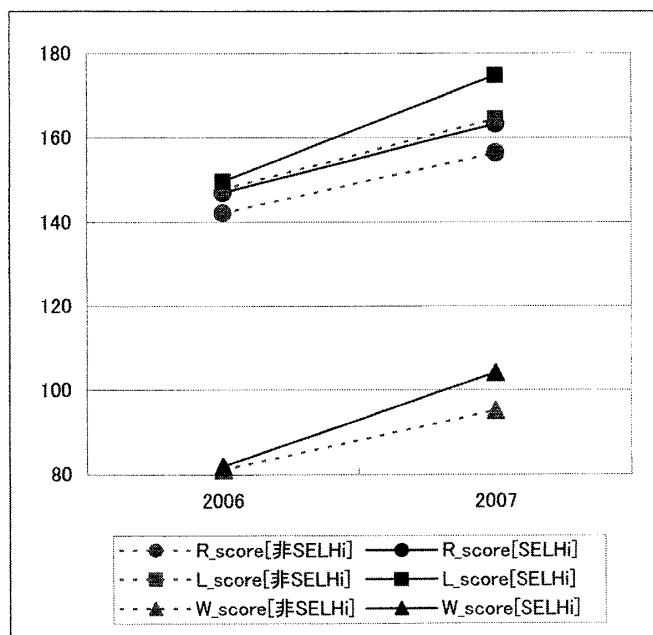


図 3 SELHi 校・非 SELHi 校能力スコア過年度比較

#### 4. 考察および今後の展望

プロジェクトにおいては夏季と冬季の二回に渡って、Can-Do 項目を利用した校内研修が行われている。夏期の研修では清泉アカデミック Can-Do 尺度における 20 個の Can-Do 項目をもとに、それぞれのスキルについて各学年の前半と後半でその学校の生徒ができると思われる段階を教員間で協議した上でチェックしてもらった。チェックにあたっては 70-80% の生徒ができると思われる段階を想定してもらい、50% くらいの生徒ならできると思われる段階は ( ) に入れてもらった。また 4 月の実際の生徒調査結果から入学時でどの程度の生徒が、どのようなことを、どのくらいの程度できると思っているのかのチェックを行った。その上で中学までの学習経験の度合いや今後の学習へのニーズを考慮に入れた上で目標を調整し、その学校で力を入れている、または力を入れて行きたいスキルは何かを討議してもらうことにより、Can-Do 項目によるスキルマッピングを行い、共通フレームワークをもとにその学校独自の英語フレームワークを作成してもらった (図 4)。

こういった言語能力発達段階を記述したフレームワークは、ヨーロッパにおける CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) (Council of Europe, 2001; North, 2000) を始めとして、諸外国で開発され (長沼, 2005)、実際の教育場面で活用されてきており (Council of Europe, 2002; Morrow, 2004)、そのような汎用的なフレームワークにおける能力段階を参照しつつ、それぞれの教育的文脈に合わせたローカルなフレームワークを構築していく必要があると思われる。そのため夏期研修においても、単に清泉アカデミック Can-Do 尺度の項目でのスキルバランスと発達段階をチェックしてもらうだけでなく、必要であれば、尺度にはないが力を入れているスキルに関してオリジナルの Can-Do 項目を作成することも奨励した。実際に共通フレームワークでスキルマッピングを行った結果、3 年生の後期には全てが達成されているといった目標を立てている高校もあらわれたが、現実にはそのような目標はかなり達成が困難であり、それが望ましいことかどうかもわからない。むしろ、このような共通フレームワークをもとに教員間で議論が行われ、目標が共有され、科目間や学年間の調整が行われるといったことに目的がある。こういったフレームワークをもとに、どのスキルをどの段階で伸ばして行き、卒業時にはどのような能力を持って大学で学習を続けていくのかを、生徒にも認識させていくことが自律的な学習者を育てていく上で大事であろう。

目標		1年				2年				3年			
		前期		後期		前期		後期		前期		後期	
		Ts	Ss	Ts	Ss	Ts	Ss	Ts	Ss	Ts	Ss	Ts	Ss
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	A1											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	A2											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	A3											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	A4											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	A5											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	B1											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	B2											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	B3											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	B4											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	B5											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	C1											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	C2											
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	C3											

図4 清泉アカデミック Can-Do 尺度を利用した共通フレームワーク

夏季研修ではこのようにして中心として目標とするスキルを決めてもらった上で、実際にタスクを1つもしくは複数作成し、2学期における実行計画を立ててもらった。それぞれの高校で作成されたタスクは重なりがなく、多岐にまたがったものであり、尺度にある項目に適宜変更を加えたものもあれば、まったく独自の Can-Do 項目に基づいているものもあった。初年度では年度の途中からのタスクの導入であったため、現実には現状のシラバスを大きく変更することは難しく、限定された形での実施であったが、それぞれに工夫された実践が行われており、冬季研修ではそれらの結果を共有し、次年度の以降の計画を検討した。

今回の結果からは SELHi 校においてより Can-Do 能力の伸びが見られる結果となったが、これは今回のプロジェクトだけでない、SELHi としての取り組みの結果もあってこそその結果と思われる。SELHi 校だけでなく非 SELHi 校においても、このように実際にタスクを作成し、実施をしながら客観的な伸びも検証し、それと同時に教室での実践がさらに改善されていくことが望まれる。しかしながら、現実には時間や労力の面で、全ての高校で一足飛びにタスク作りまで行けるかという点で難しい。そのため、段階的な導入方法の工夫が必要となってくるだろう。以下に示すのはその段階的な導入に関する試案であり、今後のプロジェクトにおける実践を通して、実効性を吟味していきたい。



## < Can-Do 尺度を応用したプロジェクト段階的实施計画 >

### (第1フェーズ) ～スキルマッピング～

1. 英語 Can-Do フレームワークを用いて、各 Can-Do 項目で記述される活動に該当もしくは類似する活動が、各学年の前後期にどの程度行われているかのチェックを行う
2. チェックにあたっては、可能な範囲で、よく行っている (◎)、行っている (○)、たまに行っている (△)、ほとんど行っていない (×) の頻度を、その学年の授業科目全体から判断する
3. Can-Do / ニーズ調査の結果を参照した上で、外国語科として重視しているコアスキルを話し合い、授業間および学年間でのスキル連携の可能性を検討する

実際にどの程度現状で行っているかという視点から授業分析を行い、コアスキルとなるスキルに関して、授業間や学年間でのつながりを意識することを目的とする

### (第2フェーズ) ～授業内タスク分析・記述～

1. コアスキルに関して、現状での各授業内での取り扱い(タスク)を記述する。その際に可能であれば、Can-Do 記述の修正を合わせて行う
2. 可能な範囲で授業間および学年間でのスキル連携を踏まえた上で、次年度に向けた英語 Can-Do フレームワークの修正を行う。また適宜授業内での取り組みの記録を残していく

上記のコアスキルの意識化をより明確にするために、可能な範囲で現状の各授業における授業内タスクの分析および記述を行った上で、今後の授業間・学年間のスキル連携を具体的にプランニングしていく。その中でスキルの観点から授業展開を意識し、授業担当者間で対話を行う機会が増えていくことを目的とする

### (第3フェーズ) ～評価タスク開発～

1. コアスキルに関して、授業内での取り組みの実態に合わせて Can-Do 記述を修正し、評価タスクを開発および実施する(事前事後比較を行う)
2. タスクの評価基準を作成し、Can-Do 項目の4段階の能力段階の評価を行った上で、結果を分析する。また、評価基準を作成する中で、Can-Do 記述および評価タスクの修正を行う

3. 可能であれば、授業タスクと評価タスクを区別し、授業内で行っているタスクのどの部分を評価として利用するか、または別途評価タスクを開発し、実施するのかの検討を行う

評価タスクを具体的に考える中で、コアスキルに関する Can-Do 記述や基準がより明確になることを目的とする。また評価タスクを開発することにより、外部スコアだけに依存しない、授業の取り組みの効果検証と、具体的な評価を伴ったスキル関係を可能とし、教員間でスキルに対する視点が共有されることを目的とする

参考文献

- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge: Cambridge University Press. (吉島茂他訳 (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)
- Council of Europe (2002) *Common European Framework of References for Languages : Learning, Teaching, Assessment - Case Studies*. Strasbourg: Council of Europe.
- Morrow, Keith (Ed.) (2004) *Insights from the Common European Framework*. Oxford: Oxford University Press.
- North, Brian (2000) *The Development of a Common Framework Scale of Language Proficiency*. New York: Peter Lang.
- 長沼君主 (2005) 「到達度評価のための言語能力発達段階記述の枠組みの必要性：テストで測ることができるものとできないもの」『AJALT』第 28 号 (pp.18-24)
- 長沼君主・宮嶋万里子 (2006) 「清泉アカデミック Can-Do フレームワーク構築の試みとその課題と展望」『清泉女子大学紀要』第 54 号 (pp.43-61)
- 長沼君主・永末温子 (2006) 「SELHi 実践に基づく香住丘 Can-Do グレードの開発」第 45 回 JACET 全国大会要綱 (pp.196-7)
- 吉田研作・渡部良典・根岸雅史・長沼君主・ベネッセコーポレーション国際教育事業部 (2004) 「日・韓・中の英語教育の現状と今後の課題」『英語教育 10 月増刊号』(pp.66-72)